

心からのお詫びとは

校 長 武井 正明

皆さんもご存じですよ。一昨日、江藤農相が「私は米を買ったことはありません。支援者の方々がたくさん米を下さるので、売るほどあります。私の家の倉庫には」と発言して物議を醸しました。農相は発言を撤回して陳謝しました。

私は日頃注意しながらもいまだに、不用意な言動で人を傷つけてしまうことがあります。基本的に、失言というものは撤回しようが陳謝しようが、取り返しはつきません。

「口が滑った」なら尚更それは、本人が日頃思っていることの**氷山の一角**だから、ごまかしようがないものなのです。

そして自分自身の、人としての信用を一瞬で失ったという事実は、全く動かしようがありません。「**覆水盆に返らず**」です。

だからこの方ができることは、ひたすらお詫びして、信用を回復するまで時間をかけて必死に努力し続けるしかないのだと思います。

私もこれまで多くの人たちを、自分の思慮不足の言動で傷つけてきました。そして、それは相手の人が赦してくれない限り、時間が経とうが決して赦されるものではないと思っています。それは大人も子どもも同じです。自分がやった行いは、最終的には総て自分に返ってきます。これを「**自業自得**」と言います。

私は口癖のように、吉中の教職員に「常に相手意識を」と話しています。しかしそれは自分自身にも強く肝に銘じている言葉です。この相手意識というものは、油断するとあっというまに「自己本位」に変わってしまう危険な代物なのです。

「このくらい言っても大丈夫だろう」

「お互いの関係なら、これくらい言っても許してもらえらるだろう」

そのどれもが、判断の基準は、自分目線の甘いハードルです。

本当に反省して、懲りたはずなのに、またやってしまう自分がいます。

しかし、私はこの方のように、妻に打ち明ける勇氣はありません。妻に軽蔑されるのは本当に辛いことです。だからこの人の「妻に怒られました」という発言は、私から見れば、ひじょうに軽い響きでしか聞こえてこないのです。

私は服装にこだわる性格ではありません。しかし、上司に呼びつけられて出向く際にネクタイもせず、ボタンを開けて、青と白の縞のシャツで行く度胸はありません。

またそれを「身なりを整えて出直してこい!!」と、一喝することもなく謝罪を受け入れる上司も、余程ナメられているのか、器が大きいのか、これも全く理解できません。

ただ、日本の農業やお米についての未来への懸念がますます払拭されないことだけは、確かなようです。「**実るほど頭を垂れる稲穂かな**」という言葉思い出しました。